

解剖実習を終えて

医学群 医学類 2年

松本いずみ

6週間の解剖実習を終えて、更に一段階成長できたと思う。解剖初日、不安と緊張でドキドキしながら解剖室に入った瞬間が鮮明に自分の中に刻まれている。そこから6週間は、怒涛の日々であった。1日5時間近く、集中力を保ったまま細かい作業を続け、実習を終えた後は、復習に加えて次の日の予習。6週間、ただひたすら解剖に向き合っていた。解剖実習を終えた今になり、振り返ってみて思うのだが、まるで違う世界で生きていたかのようであった。そのくらい尊くて貴重な日々であった。

解剖実習と言ったら、人体の構造を理解し、将来、治療をできるようにするために行われているものだと思っていた。もちろん、それも重要視されていたが、他にも多くのことを学ぶことができ、また考えさせられた。まず一つ目は、枠にとらわれず、柔軟な思考を持つということである。教科書や実習書にしたがって解剖は進んでいくのだが、想像していたものと実際解剖したものとは大きく異なっているし、教科書通りではないことも普通であった。その相違を常に疑っていく必要があるのである。これは、今後も通用していくことであると考え。私たちは何事も定義づけされていたり、枠に当てはめて分類したりすることで安心を得ているように思う。そして一旦その位置に落ち着くと、それを改めて疑うのは難しい。しかし、疑い続けないと、新しい発見はないし、何なら過失につながりかねない。例えば、医師が患者さんの診察をし「これはがんですね」と診断したものが、実はがんではなかったということも、常に疑い続けないと気づけないことである。このように、人の体がこんなにも多種多様であったことと、それに気づく視点を持てたことは、将来、患者さんを目の前にして医療を施す際に非常に重要であると思う。

また患者さんに思いをはせることの大切さも学んだ。解剖初日、初めてご遺体にメスを入れる瞬間、あの気が引き締まる思いはいつまでも忘れたくない。こうして、たくさんの方々の支えがあって、自分が医学生として成長できていることを実感した。私が医学部を志願した時には、自分の意志だけで志願したように思う。それが、今回の解剖を通して、ご献体してくださった方々や、そのご家族の意志も引き継ぐのだと思い、改めて気が引き締まった。

この6週間は、ご献体してくださった方の期待に応えられるよう、精一杯猛進した。一つでも多くのことを目の前から学ぶことができるように、学ぶ姿勢を保ち続けた。実習最終日、花束を買いに行った。恥ずかししながら、人生で初めて花束を買った。なんて美しいのだろうと感動するとともに、花束に込めた思いがご献体してくださった方に届きますようにと願った。まずはご献体をしてくださったご本人様に、そしてそのご家族、先生方、最後に、共に学んだ仲間感謝を込めて。誠にありがとうございました。

解剖実習を終えて

医学群 医学類 2年

渡部嘉徳

本日、ご遺体を納棺した。ご遺体を解剖台から枕や布団のある棺に移したとき、この方は確かに生きていらっしやっただと、そして本来はより自然な形で、もっと安らかな形でいることができたのだと、今更ながら感じた。

実習初日に見た光景は今でも忘れられない。実習室に足を踏み入ると、そこには白い布に丁寧に包まれた多くのご遺体が解剖台の上に安置されていた。その光景は極めて神妙かつ非常識的でありながら、どこかやさしさがあるように思えた。納棺式を終えた今、解剖台の上には棺と花束が乗っている。それが言わば本来の形であり、その光景はご献体された方々とご遺族の方々に対する敬意と感謝、そしてやさしさに満ちているように私には感じられた。

ご献体くださった方からは非常に多くのことを学ばせていただいた。教科書の2次元的な絵図が今や実体的な感覚へと自然に置き換わって把握され、それと同時に、実際の見え方との乖離や個人差による多様な型をも理解できるようになった。無機質な活字情報や模式化された図表と現実の生体的現象とが架橋され相互に往来する感覚は、実に不思議であるが、これこそが真の学び、生きた知識なのだと思う。ほぼ全ての感情が捨象された教科書の裏にある、量り知れないほど妙なる命に対する驚嘆や感動の念についても、改めて思惟するようになった。座学と実習を毎日繰り返す中で、自らの学びが如何に責任を伴うものであるか、如何なる態度・姿勢で勉学に励むべきなのかということも痛感させられた。

しかし、実際の解剖においては躓くことが多く、最善を尽くせなかった自分がいたのもまた事実である。構造や状態があまりにも解剖学図譜とは異なっているように剖出できなかつたり、思いがけず構造を破壊してしまったりすることが幾度もあった。納棺式で先生が述べられていたように、献体をするのは非常に貴いご遺志によるものであり、ご遺族にとっても尋常ではないほどの心の負担がかかるものであると思う。私自身、母親が献体を申し出ていることに対して非常に複雑な思いであり、未だに葛藤がある。目の前にご献体くださった方がいらっしゃるの、それら全てを抱えてのことであるにも関わらず、力量不足によって上手く剖出できないでいる自分が情けなく、悔しく、罪深く思われた。そして実習中に何度も「ごめんなさい、ごめんなさい」と言っていた自分がいた。

「讃仰、医学徒にはげましと大きな期待を寄せて献体された方々の御霊を永遠に讃えてここにいしぶみを築く」

納棺式の後、私は友人と慰霊碑を訪れた。碑文を読み、ご献体くださった方々やご遺族の方々に想いを馳せ、心の底から何かが進み上げてくる感じがした。今、自分が感じている未熟さを受け止めよ、そして精進せよ、そのように言われている気がしてならなかった。

末筆ながら、コロナ禍の中でも、こうして解剖実習を最後までやり遂げられたのはご献体くださった方々を始め、大事なことを何度も教えてくださった先生方や身体的にも精神的にも厳しいときに共に頑張ってくれた友人たちのおかげです。心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。ここで経験した全てのことを糧に、決して忘れず、きっと素敵な医者になれるようにこれからも邁進してまいります。